どうしん夢プロジェクト 広告企画

経験と勘で勝負

サンタ捜索再始動

10年目も札幌から

サンタは本当にいるのだろうか―。世界中の子どもたちにとって永遠の謎「サンタの存在」に、あらゆる角度から迫り証明することで、サンタを信じ夢見る子どもたちを応援したい。その思いから2010年に立ち上がった「どうしんサンタ捜索チーム」が今年で10年目を迎える。節目となる年に注目が集まる中、捜索チームは北海道新聞本社（札幌市中央区）で記者会見を開いた。再始動の発表とともに語られた今年の捜索方針は、原点回帰ともいえるものだった。

捜索に向けて動き出すべく札幌市内に集結した「どうしんサンタ捜索チーム」のメンバー＝11月、札幌市中央区

「捜索の原点に立ち返り、プロの意地を見せる年となるだろう」どうしんサンタ捜索チームで指揮を執る三田育三（みた・いくぞう）本部長は、会見の冒頭で宣言した。

同チームは10年目を迎えるにあたり、過去9年分の取り組みと結果をまとめ、公開している。毎年新たな捜索機器を開発し、AIを駆使して捜索を行っているが、今日まで思うような成果が得られていない。捜索方針の転換を迫られた同チームは、チームが培ってきた「経験」と「勘」を頼りに捜索を行うという、大きな方針転換を打ち出した。

三田は「9年捜索をやり遂げた我々には、経験という糧がある。これは何にも代えられない財産である。プロとして胸を張り、サンタの本質に立ち返って捜索すべきだ。なんとしても姿をこの目で捉え、記録し、皆様にお届けする。それが私たちの存在意義である」と決意の表情で話した。

今年からサンタ捜索チーム技術部特別アドバイザーに就任したサンタ情報学者の来栖正志（くるす・まさし）氏は記者会見に同席し、サンタ捜索に適しているのはAIより人間の知能であるという研究結果について言及した。来栖氏によると、同チームが開発したAIロボット「BUNBO（ブンボ）」にサンタを識別させる実験を行なった。3000パターンの赤と白の物体や生き物を一定時間読み取らせて、その情報の中からサンタを認知できるかという調査だ。「BUNBO」は24時間計算し続け、1週間たってようやく正解を導き出したという。これまでの捜索により、サンタはその姿を肉眼で見つけるのは困難なほど高速で移動し、さらに来道しているのはほんのわずかな時間であることが分かっている。来栖氏は「仮にAIの認識力メラが夜空を高速で移動する物体を捕らえたとしても、サンタだと答えを出せるのは年が明けてからだろう。しかし人間は、夜空に現れたそのシルエットだけで瞬時にサンタと判断することができる。子どもたちにはなおさら、はっきりとその姿が見えているのかもしれない」と話し、捜索方針を強調した。

今年のサンタ捜索が頼るのは「人」だ。捜索員の勘がサンタの思惑と重なったとき、その場所にサンタが現れるのではないか。チームの動向に注目が集まっている。

DOSHIN SANTA SEARCH
サンタ捜索WEB
読みがな入り紙面が見られる!
http://adv.hokkaido-np.co.jp/santa/

（図）捜索チーム9年の取り組みと結果

年代	取り組みと結果
2010	どうしんサンタ捜索チーム発足 トナカイの特殊波を捉える「トナカイレーダー」導入 テレビ塔で足跡発見、影を撮影成功
2011	音速を捉える高感度ライブカメラ導入 道新本社ビル屋上でサンタからのメッセージ発見
2012	特別捜査班「S.A.N.T.A」発足 100年前の衣服発見 ライブカメラでサンタの姿を撮影成功
2013	最重要捜索エリア「エリアSANTA」を指定 サンタが使用する地図を発見 捜索員を増員し、各地で痕跡発見
2014	誘導灯でサンタを呼び寄せることに成功
2015	米国に捜索員を派遣。日米合同捜索 サンタの指紋を採取
2016	サンタ捜索システム「ENTA」導入 40年前のサンタメモやトナカイの鈴など痕跡発見
2017	AIロボット「BUNBO」開発
2018	脳波によるドローン・監視カメラ遠隔操作マシン「SSB」開発 捜索員の携帯端末にサンタアラートを導入 サンタ予報一般公開

「おすすめはやさしいタッチの絵本」と話す木村さん

本で心をあたためよう

クリスマスに本を贈る習慣は、近年ますます定番になっている。売場に並ぶ多種多様なクリスマス本の中から喜ばれるプレゼントを選ぶコツを、コーチャンフォー美しが丘店の木村美葉さんに伺った。「絵柄やストーリー、作家さんなど選ぶ基準は多々ありますが、どれにしようか迷った時は第一印象で気になった本に決めるのが、いいプレゼントを選ぶコツです」。またクリスマス本の魅力について「物語の主人公が、サンタだったり、プレゼントを待つ子どもだったり、色々な目線から書かれているのが面白い。様々なシチュエーションのクリスマスを想像してみてください」と話してくれた。

同店では11月中旬より、売場を強化しラインアップも増やすという。人気なのは文字が読めない小さな子どもでも遊べる仕掛けつきの絵本や、大人も懐かしい気持ちになる定番の絵本。「何度も読み返したくなる本を贈って、思い出を作ってほしい。私も初めて買ってもらった絵本は未だに覚えています」と木村さん。クリスマスに本を贈り、親子のコミュニケーションのきっかけを作ってみてはいかがだろうか。あたたかい時間を過ごせそうだ。

「サンタフォーカス」

求められる読書の力

サンタは博識だ。世界中の子どもたちの願いをかなえるプレゼントを選ぶために、あらゆる言語や文化を理解し、歴史から最近の流行まで様々な情報を日々仕入れている。その情報収集に、本は欠かせない。サンタは現在推定1700歳である。世界196カ国から1年に数冊ずつ仕入れていると計算すると、その読書量は日本で一番規模の大きい国立国会図書館東京本館の蔵書数2500万冊は優に超えるだろう。

一方で日本では若者の読書離れという言葉が浸透している。原因のひとつにスマートフォンの普及により、本の接触時間が減ったことが挙げられる。しかし読書することは、読解力や想像力、思考力、表現力等を養い、知識を得られ、多様な文化の理解につながる。これらはまさに現代の共生社会において求められているものではないだろうか。

サンタが世界中の子どもたちに優しくできるのは、たくさん本を読んでいるからだ。サンタの読書量には到底追い付けなさそうだが、今年のクリスマスはサンタに倣い、本を買ったり図書館で借りたりして、読書の時間を作ってみてはいかがだろうか。

企画制作／北海道新聞社営業局

この広告企画はお子さまと楽しんでいただくため、夢のある構成となっています。フィクションを多く含みますがご理解、ご了承願います。次回は12月中旬朝刊掲載予定

©北海道新聞社 無断転載、複製及び頒布は禁止します。